ニコちゃん meet with あのラボさん!! 3年間のアクティビティの様子

2021

出会い　未知との遭遇

心拍、 タッチセンサーを使った、音と光のインスタレーション

今回の取組みの中心であるゆうまちん、ゆうくん、よしくんの3人は、2021年10月、初めてanno lab(あのラボ)と出会いました。(①)
「3人の好きなものは?」「いつもどんな遊びをしている?」「anno labさんはどんな作品をつくっている?」など、まずはお互いの自己紹介からスタート。その後、子どもたちの微細な発信や反応が魅力的な表現として空間に広がること、子どもたちに「ワクワク」が生まれることをイメージしながら試行錯誤。(②)
そうして出来上がったのが、心拍をキャッチするセンサーや人と人が触れることで反応するセンサーを使った、音と光のインスタレーションでした。「ドン・ドン・ドン」と心拍がドラムの音として広がり、3人にタッチすると「ポロン」とピアノ音やカラフルな光が流れ星のように流れる幻想的な空間になりました。(③)
ただ、暗がりでの実施によって子どもたちの表情が見えなかったことや、心拍やタッチの「インプット」と、音や光の「アウトプット」の関係が複雑でわかりにくいなどの課題も。

振り返り

「子どもたちがどんなことを知覚できているかわからない分、作品の説明をしっかり行いたい」というケアスタッフと、「子どもたち自身が楽しめているはずだから、『わからない』をわからないままに、その場を五感で楽しめたらいいのでは?」というアーティスト、双方の意見が出ました。

幻想的で美しい体験のようでいて、その場自体が、「子どもたちと楽しむ」ことにつながっているか、「ワクワク」しているか改めて、アーティストとスタッフで話し合うことになりました。

作品の仕組みを理解する時間が少なく、ケアスタッフは取組みの進行に戸惑いを感じていた。その不安感が子どもたちにも伝わったのではないか?

明確で短い「アウトプット」でないと、障がいのある子どもたちは気づかない可能性もある?逆に刺激(アウトプット)が強すぎると身体への影響が心配。

重い障がいのあるゆうまちん、ゆうくん、よしくんから、「言葉」によるフィードバックはないけれど、子どもたちの「楽しむ力」を信じたい。

2022

出会い直し　日常のとなり

透明ビニール傘を使った、タッチセンサーによる音と光のアート

2022年3月、アーティスト、ケアスタッフ、財団(FFAC)で話し合いを実施。その結果、「もっとお互いの考えや背景を知った方が良い」という結論に。そこで、ケアスタッフはメディアアート作品の体験と、アーティストがどんな思いで作品に向き合っているかを知るため、anno labの展示会に参加。(④)かたや、アーティストは、ケアスタッフが子どもたちとどのように接し、どんな関係性を築いているのかを知るため、普段の施設を訪問。(⑤)お互いをより深く知ることで、《アーティスト》と《ケアスタッフ》の距離が近づいていきました。
重い障がいのある子どもたちにとって、医療・福祉ケアを行うスタッフたちは切っても切り離せない存在。子どもたちが楽しんでいるかどうかわかりづらいからこそ、同じ時間と空間を過ごす大人たちもリラックスして楽しめたら、より一層「ワクワク」が生まれやすい場になるのではないか。そのためには、「アクティビティの時間」をはっきりと設けるのではなく、子どもたち一人ひとりのタイミングに合わせて、普段の遊びの延長としてやってみようということになりました。
そうして試作を重ねて(⑥)出来たのが、普段の遊びでも活用している「透明ビニール傘」を使った音と光のアート。(⑦⑧)「インプット」はタッチ。「アウトプット」は音と光。昨年度よりもシンプルな構成になったことで、子どもたち・大人たちがそれぞれの表情を見ながら、触れ合い、音と光を楽しむアクティビティになりました。

振り返り

子どもとケアスタッフが一緒に楽しむことが、ニコちゃんの会でも大切にしていること。シンプルではっきりとした「インプット」「アウトプット」によって、お互いの表情を感じることができたアクティビティになったという感想が聞けました。一方で…

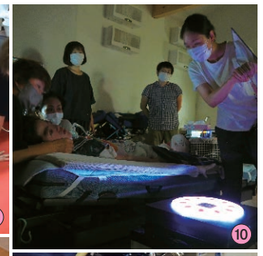
ケアスタッフへのヒアリングを聞き入れすぎると《アート》ではなく《デザイン》になりすぎるのでは?

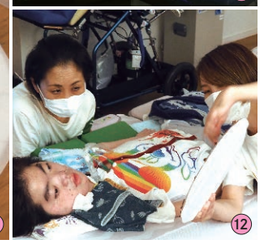
このアクティビティを他の福祉事業所、重い障がいのある子どもたちに広めようとした時に、どのように伝えればいいのか?

子どもたちに「聞いてみる」、子どもたちと「一緒につくる」時間がもっと必要だったのでは?子どもたちにもっと深く関わってほしい!

新たな課題が見えてきました!

2023





アーティストと子どもたちのコラボレーション

ゾートロープ体験 & お披露目会

3年間のプロジェクトの集大成として実施したのが、アニメーション表現の一つである「ゾートロープ」※を活用した遊びの体験でした。アクティビティの初日は、anno labと一緒に、みんなでどんなものを置くとどんな動きになるのかを確認。(⑨)ベッドの上の子どもたちにもゾートロープを見えやすくするため、鏡を使うなど工夫しながらコマ送りのように動くアニメーションを楽しみました。(⑩)
それからお披露目会までの間に、子どもたちとニコちゃんの会のケアスタッフで、円盤上にお花や絵、子どもたちが好きなものを一定の間隔で並べた、思い思いの作品を共同制作しました。(⑪)
そして2ヶ月後、anno labと一緒にそれぞれの作品がどんなアニメーションになるのか、お披露目会がスタート!(⑫⑬)例えば、ゆうくんの作品は「花火」で、中心からカラフルな花火が広がる絵をケアスタッフと一緒に制作。その他にも、みんなの前でニコちゃんの会に通う子どもたち、大人たちの各々の作品が披露されていきました。
この日は、これまでアクティビティを行ってきた会場よりも広く、コロナも落ち着いたことから、ニコちゃんの会のケアスタッフだけでなく、事務所スタッフも参加。大学院生の見学者やFFACの広報担当者など、たくさんの関係者とアクティビティを共有することができました。お披露目会では、仰向けでも見やすいよう、天井にスクリーンを投影し、一緒に鑑賞。ゆうくんが作った花火の作品が動き出すとその場にいた一同が「おー!」と盛り上がり、ゆうくんも、一緒につくったスタッフも、誇らしげな表情でした。

振り返り

ゾートロープ自体の面白さとともに、anno labとニコちゃんの会、子どもとスタッフのコラボレーションがたくさん生まれる場となり、メディアアートの本質の部分を体験できるアクティビティだったという感想が聞けました。

ゆうくんの感情をキャッチできることはそう多くない中で、今日はすごく笑っていたのを感じられたのが嬉しかった。

3年間の集大成だったからドキドキしていたが、大成功に終わってよかった。スタッフもお披露目会だけでなく、作品の制作過程から面白がってくれた。子どもたちのワクワクもキャッチできる瞬間が確かにあったアクティビティだった。

絵がずれずに、はっきり色が出てくるようにする木工用ボンドを使ったアイディア、ゾートロープの映像を天井に映すというアイディアなど、普段子どもたちとクリエイティブな遊びを重ねているニコちゃんの会だからこその現場力がいくつも発揮された。

ゾートロープが不思議で見えるものが途中から変わるのも興味深かった。狙った絵とずれている絵と、順番順番に出てくるのも面白かった。

見学者感想

- ○ 三年間の積み重ねがあってこその今日。この熱がどんどん高まっていくことに興味を持った。
- ○ アーティスト、スタッフが子どもたちのことを話している姿、その饒舌さにあらゆるものが詰まっている気がした。

※ ゾートロープ … 円盤の上に少しずつ違った“動き”を表したものを置いて、スリットを通して見たり、フラッシュをたき、光が点滅した状態で見てみると、ものが動いたように見えるというアニメーション表現のひとつ。

Comment 関わった人たちの変化や気づき

あのラボ
藤岡定さん

子どもたちと作品を通して語り合う体験はとても新鮮で楽しい時間でした。同時に、子どもたちだけを見てアクティビティをしてもうまくいかないと、僕たちは学びつつ、僕たちが普段どんな思いで活動しているのかをスタッフさんたちにも理解して頂きつつの、相互に色んな発見をしあう場だったなと思います。

ニコちゃんの会
福田万由未さん

緊張もするし、いいとこを見せたくなったりもする、気まずくなったら目を背けたりもする、褒められたら照れくさくなる、そんな子どもたちの「子どもらしさ」に改めて気づけた時間でした。そして立場が違えば捉え方が違い、人と人が歩み寄ることの難しさと尊さを痛感した学び多き3年間でした!

FFAC
コーディネーター
藤友里江さん

この子と、この人と「わかり合いたい」「ワクワクしたい」を諦めずに、大人たちも本気であそび、目に見えないものを確かめ合いながら進めた過程はとてもクリエイティブなものでした。これで完成!というわけではないですが、アートを通した一つの関わり方が見えてきたのかなと思います。